

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2023年9月22日

スターウォーズと神話の力

映画「スターウォーズ」シリーズのファンです。“ガチ勢”を自認しています。「スターウォーズ」シリーズは1978年公開のエピソード4「新たなる希望」から（注1）2019年のエピソード9「スカイウォーカーの夜明け」まで、スピンオフ作品も含めすべて映画館で観ました。DVDも全作品そろえています。「その程度のことで一人前のスターウォーズ・ファンを名乗らないでほしいんだけど？」といった意地悪なツッコミに対しては、「それじゃ、エピソード1でパドメ・アミダラがトレード・フェデレーションから侵攻を受けて、惑星ナブーを脱出するときに乗っていた宇宙船の名前知ってる？」と逆襲できる程度のトリビアも持っています。

筆者が映画スターウォーズと出会ったのは、1978年、中学2年の夏休みでした。当時、水戸市内の予備校の夏季講習に通っていた（通わされていた）筆者は、そこで知り合った友人のA君に「明日、予備校をサボって映画に行かない？」と誘われました。もともと夏季講習にさほど（まったく）熱意を感じていなかった筆者は二つ返事で承諾し、当時、泉町の裏通りにあった映画館で運命の出会いをしたのがスターウォーズでした。（注2）

“A long time ago in a galaxy far far away”という冒頭の字幕に続いて、ターンタン、タララターンタン、タララターンタン、タラララ…というメインテーマが流れた瞬間、自分はスクリーンに釘付けになっていました。それまで観たどの映画とも違うその世界観と迫力、ストーリーに引き込まれました。映画が終わり、エンドロールが流れる中、呆然と映画館のシートに体をあずけながら「将来、ボクは宇宙船のパイロットになって悪の帝国と戦おう…」と荒唐無稽な妄想にひたっていたのを覚えています。当時、中2病という言葉はありませんでしたが、今振り返るとあれは確かに中2病だったなあ、と思います。とにかくスターウォーズは少年時代の筆者の心に巨大隕石の衝突並みの強烈なインパクトを与えたのです。

さてここで、まだ作品を観たことがないという生徒諸君のために、スターウォーズ・エピソード4のあらすじを簡単に紹介しておきましょう。

帝国による恐怖政治に銀河が覆われる中、レイア・オーガナ姫は、惑星を破壊する威力を持つ帝国の巨大要塞デススターの設計図を届けようと宇宙船で反乱軍の基地を目指す途中、帝国の悪の枢機卿ダース・ベイダーに捕まってしまいます。とらわれる寸前、レイア姫は設計図をR2D2、C3POの2体のドロイドに託し、2体は脱出ポッドで砂の惑星タトゥイーンに不時着します。

2体のドロイドは砂漠の廃品回収業者ジャワ族に捕まり、それを買った農園で働く青年ルーク・スカイウォーカーの所有物となります。R2D2の脱走をきっかけに、ルークは砂漠に住むベン・ケノービ老人と出会います。R2D2が投射した、「オビ・ワン・ケノービ」に助けを求めるレイア姫のメッセージを見たベンは、自分がかつてオビ・ワン・ケノービと名乗るジェダイの騎士であったことを明かします。ジェダイの騎士とは、宇宙に満ちるフォースの力を操り、ライトセーバーという光線でできた剣を武器に、宇宙の平和と正義のために戦う人々のことです。ベンは、ルークの父も優れたジェダイ騎士であったこと、しかしベンの弟子だったダース・ベイダーという男の裏切りによって殺されたこと、父の強いフォースの力は息子であるルークにも受け継がれていることを告げ、設計図を反乱軍に届ける旅にルークも同行するように求めます。

荒くれ者が集まる酒場で、ベンとルークは、ハン・ソロという密輸業者に出会います。毛むくじゃらで怪力の大男チューバッカを相棒として、帝国の戦艦の追跡だって振り切れると豪語するハンサムで危険な香りのする男、ハンの宇宙船ミレニアムファルコン号をチャーターしたベンとルーク、そして2体のドロイドは、宇宙へと飛び立つのです。

目的の宇宙座標に到着した一行ですが、そこには設計図を奪い返すべくデススターが待ち受けていました。ミレニアムファルコンは牽引ビームで捕獲されてしまいます。デススターの強力な牽引ビームのパワーを切るため、ベンは一人、デススターの中枢部に潜入します。一方、デススター内にレイア・オーガナ姫が囚われていることを知ったルークは、ハン、チューバッカとともにレイア姫を救出に向かいます。姫の救出に成功し、帝国軍兵士たちの激しい追跡をかわしてミレニアムファルコンの近くまで戻ってきたルークたちは、ダース・ベイダーと戦うベンの姿を目にします。ダース・ベイダーはかつての師であるベン・ケノービのフォースを感じ取り、待ち伏せていたのです。激しくライトセーバーで切り結ぶ二人でしたが、ルークの姿を目にすると、ベンはふしぎな微笑みを浮かべてなぜかライトセーバーを収めてしまいます。無防備になったベンに、ダース・ベイダーのライトセーバーが振り下ろされます。しかし、ベンの肉体は消え失せ、その場には彼のマントだけが残されます。思わずそちらへ駆け寄ろうとしたルークの頭の中に「走れ、ルーク！」というベンの声が響き、ルークはレイア姫をともないミレニアムファルコンを目指して走ります。ミレニアムファルコンに乗り込んだルークたち一行は、デススターからの脱出に成功するのです。

惑星ヤヴィンの第4衛星にある反乱軍の秘密基地でR2D2にインプットされたデススターの設計図が解析され、デススターの弱点が判明します。原子炉に直結する排熱孔をプロトン魚雷で直撃すると、原子炉の爆発を誘発しデススターを破壊することができるのです。しかし、排熱孔の大きさはたったの2メートルで、強力なシールドと対空砲火を備えるデススターにたどり着けるのは小型で動きの早い単座型戦闘機しかありません。反乱軍の秘密基地にデススターが迫る中、Xウィング戦闘機をはじめとする反乱軍の小型戦闘機が次々と出撃していきます。パイロットに志願したルークは、ハン・ソロにも戦闘に加わるよう求めますが、「自殺行為はゴメンだ」とハンは基地を去ります。

デススターに到着した反乱軍の攻撃隊は突入を試みますが、帝国軍の戦闘機タイファイターの迎撃を受け、次々と撃墜されていきます。最後の攻撃隊を任されたルークが排熱孔に向かうと、その背後をダース・ベイダーの乗ったタイファイターが襲ってきます。ルー

クの機をロックオンしたダース・ベイダーがまさに攻撃しようとしたそのとき、突如現れた宇宙船がその進路を妨げ、操縦性を失ったダース・ベイダーのタイファイターは宇宙空間のかなたへと放り出されてしまいます。ハン・ソロのミレニアムファルコンが助けに来てくれたのです。

排熱孔に接近し、自動照準器を起動したルークの頭の中に「ルーク、フォースを使え。フォースを信じろ」というベンの声が再び響きます。自動照準器を切ったルークは、フォースに従って魚雷を発射、見事目標に命中させます。デススターは一瞬、巨大な火の玉となり、宇宙空間に消滅します。

英雄となったルークとハン、チューバッカは反乱軍の基地で祝勝の式典に臨み、レイア姫から勲章を授けられます。美しい姫から目を離せないルークに、レイアは優しい微笑みで応えるのでした。

かなり省略したつもりですが、それでもあらすじだけで1ページを超えてしまいました。映画を観たことのない人も、大体どんなストーリーか分かっただけでいいでしょうか？

それにしても、なぜこんなに長々とスターウォーズの話をしているかというと、この夏に読んだ本の紹介をしようと思ったからです。その本とは、『千の顔をもつ英雄』（ハヤカワノンフィクション文庫）、『神話の力』（同）の2冊です。『千の顔をもつ英雄』は、1987年に亡くなったアメリカの神話学者ジョーゼフ・キャンベルの著作で、『神話の力』は、キャンベルとジャーナリストのビル・モイヤーズがTVのドキュメンタリー番組でおこなった対談をまとめたものです。

スターウォーズの生みの親、ジョージ・ルーカスが、キャンベルの影響を受けてスターウォーズの構想を練った、という話をずいぶん昔に何かで知り、一度彼の本を読みたいと思っていたのですが、なかなか機会がなく過ごしていました。夏休みにまとめて読もうと思い立ってチャレンジした次第なのですが、これがなかなか大変でした。読んでも読んでも書いてあることが理解できない、という体験を久々でしました。

「それはあなたの読解力に問題があるのではないの？」というご意見の方のために、『神話の力』からキャンベルの言葉を一部抜粋してみます。「(神話を読むことの意味をモイヤーズに尋ねられて) 人々はよく、われわれみんなが探し求めているのは生きることの意味だ、と言いますね。でも、ほんとうに求めているのはそれではないでしょう。人間がほんとうに求めているのは〔いま生きているという経験〕だと私は思います。純粋に物理的な次元における生命経験が自己の最も内的な存在ないし実体に共鳴をもたらすことによって、生きている無上の喜びを実感する。それを求めているのです」・・・ほら、わからないでしょ？

わからないなりに粘り強く読んでいくうちに、キャンベルの考えていたことがぼんやりと見えてきた気もします。神話学者であるキャンベルは、世界中に存在するさまざまな神話を収集していく中で、表面的には異なる別々の神話と見えるもの同士が、実は共通のモチーフ、元型を有しているのではないかと、という点に気づきます。

例えば、禁じられた行為を行った結果罰を受けるという神話は、さまざまな時代、さまざまな地域に存在しています。最も有名なのは旧約聖書のアダムとイブの失楽園の神話で

しょうか。楽園で悲しみも苦しみも知らず暮らしていたアダムとイブは、蛇にたぶらかされ、神が禁じた知識の実を食べてしまいます。そのことが神に知られ、二人は楽園を追放されてしまうという話です。ギリシア神話にも同じ主題の神話があります。プロメテウスは、主神ゼウスの命により粘土から人間を作り出しました。ゼウスはプロメテウスに、人間が生きるために必要な知恵を授けさせましたが、火を使うことを教えることだけは禁じました。しかし人間を愛していたプロメテウスはゼウスの命に背き、天界から火を盗み出し人間に与えてしまいます。激怒したゼウスはプロメテウスを山の頂に鎖で永遠に縛り付けてしまったという話です。

他にも、死んでしまった妻（夫）への恋しさを抑えられずに死者の世界を訪れる神話（ギリシア神話：エウリュディケとオルペウス、日本神話：イザナギとイザナミ）、怪物や悪魔を倒して宝物や美しい女性を得る神話（北欧神話：ジークフリート、日本神話：スサノオノミコト）、兄弟殺しの神話（旧約聖書：カインとアベル、日本神話：オオクニヌシノミコト）など、共通した形式を有する神話は地域や時代を超えて世界中で見られるようです。

キャンベルは神話にこのような共通性が存在する理由について、人間の中には「現実の観念を超えて、あらゆる思想を超越した」ものがあるからであり、それをすべての人間が等しく有していることを神話は明らかにしている、と述べています。現実の観念を超えて、あらゆる思想を超越したものって何？と尋ねたくなるのですが、キャンベルおじさんはそれをはっきりとは説明してくれません。「言葉では表現できない」根源的な何ものかが人間の無意識の層に存在している、と述べるにとどめています。

そして、その言葉では表現できない、すべての人間に共通する元型が、私たちの生きる世界の社会秩序を支え、私たちに生涯を人間らしく生きるにはどうしたらよいかを教えてくれる、というのです。キャンベルによれば、十字架につけられたイエス・キリストの復活も、菩提樹の下でのブッダの悟りも、プラトンの説くアイデアも、この言葉では表現できない根源的な何ものかにつうじているようです。

筆者がおもしろいなあ、と思ったのは、イニシエーションとしての神話についての話です。イニシエーションとは通過儀礼などと訳されます。人を今の状態から新しい状態に変化させるために課せられる儀式や行動のことです。かつて日本には“元服”というイニシエーションがありましたし、アフリカの狩猟民族の青年が槍一本でライオンと戦う経験を経てはじめて大人として認められたという習慣もイニシエーションの一つです。

イニシエーションの神話は「青年期にその扉が開かれ新しい世界に目覚める際に、その成長過程をどう乗り切るかのモデルを供給している」とキャンベルは説明します。そしてイニシエーションの神話には、ある定まった形式が存在するともいいます。もちろん、細かなディテールは異なるのですが、その展開に一定のパターンを見いだすことができる、というのがキャンベルの説です。彼の説にしたがって、スターウォーズ・エピソード4のストーリーを検証してみましよう。次の①～⑧は『千の顔を持つ英雄』の中で、イニシエーションの神話の展開パターンをキャンベルが分類したものです。（スターウォーズに当てはまらないと考えられる分類は除外してあります。）

①「冒険への召命」（英雄に下される合図）

ルーク・スカイウォーカーは、新たに手に入れたドロイドR2D2の手入れをしようとして、美しい王女（レイア姫）がオビ・ワン・ケノービに助けを求めるホログラム（立体映像）のメッセージを偶然目にする。

②「自然を超越した力の助け」（下された使命にとりかかった者に訪れる思いもかけない援助の手）

ルークはジェダイの騎士ベン・ケノービと出会い、自らの出生を知り、フォースをあやつる訓練を受ける。

③「最初の境界を越える」

ルークはハンソロと出会い、ミレニアムファルコンでベンとともに宇宙の旅へと出発する。

④「鯨の腹の中」（注3）（闇の王国への道）

デススターの牽引ビームに捕らえられ、ミレニアムファルコンが巨大なデススターの内部に捕獲される。

⑤「試練の道」（神々の危険な側面）

囚人として処刑されることになっていたレイア姫を、ルークは、ハン・ソロ、チューバッカらと協力して救出する。帝国軍の兵士や、ゴミ処理場に潜むモンスターなどに襲われるが危機を乗り越える。

ルークの師であるベン・ケノービがダース・ベイダーによって殺され、ルークは悲嘆に暮れる。

⑥「女神との遭遇」（取り戻された幼児期の至福）

美しく誇り高い王女、レイア・オーガナ姫に出会い、ルークはほのかな恋心を抱く。

⑦「究極の恵み」

ベン・ケノービの声に導かれながら、ルークは帝国軍の恐怖の要塞デススターを破壊し、反乱軍を勝利に導く英雄となる。

⑧「帰還の境界超え」（日常の生活への帰還）

デススターの破壊により、帝国軍は撤退する。ひとときの平和の中で、ルークたちは勝利を喜び合う。

どうでしょうか？こうしてみるとジョージ・ルーカスが、ジョゼフ・キャンベルの「イニシエーションの神話」説をベースにしてスターウォーズを作り上げた、という推測もあながち的外れではないと言えるのではないのでしょうか？

イニシエーションの神話で最も重要なのは、主人公が、目の前に現れる解消が困難な試練に対して勇気を持って立ち向かい、その試練を乗り越えていく、という点です。試練を乗り越えることでしか得られない成長があることを、多くの神話は物語っています。もちろんイニシエーションの機会、生涯一度きりではなく、何度も何度も訪れてくるでしょう。しかし、青年期に訪れる、未知の扉を開き新たな世界に目覚めるイニシエーションの機会がその人にとって最も重要な変化をもたらすことについては、筆者もキャンベルと同意見です。

ちょうどこの文書を書いているときに、テレビで京都アニメーション殺人事件についてのニュースを報じていました。小説を盗用されたと思いきや京アニへの一方的な憎悪をふくらませ、ガソリンをまき放火して36名の命を奪い、自らも重いやけどを負って治療していた青葉真司被告の裁判員裁判が始まる、というものでした。体の9割をやけどした青葉被告は、治療を行う医師に、なぜ自分なんかを助けようとするのか、自分は価値のない人間である、と繰り返し述べたといいます。医師はインタビューの中で、青葉被告の自己肯定感が極端に低いことへの驚きを語っていました。また青葉被告の弁護人は、犯行は「(青葉被告の) 人生をもてあそぶ闇の人物への対抗、反撃だった」として減刑を求めています。

キャンベルは現代社会を指して、「脱神話化」の進行する世界であると指摘しています。それまで、人々の共通した基盤となり、文化や価値観、社会規範や世界観を生み出してきた「何ものか」から、人々が遠く離れようとしていることへの危惧を述べています。闇の人物にあやつられ、自らの存在価値を否定し、いとも簡単に人命を奪い、人生を拒もうとした青葉被告の犯行は、脱神話化された社会、大切な何ものかから遠く離れてしまった社会によってもたらされた悲劇、という見方はできないでしょうか？

今、君の前に越えるべき壁はありますか？大切にしたい何かを、君は持っていますか？

『神話の力』の中でキャンベルが、スターウォーズに登場する「フォース」について語る場面があります。「フォースはすべての生あるものによって創り出されたエネルギーの場だ。それはわれわれを取り囲み、われわれを貫き、銀河系をひとつにまとめている」というベン・ケノービの言葉を取り上げ、キャンベルは「世界の中心や、聖なる場所、万物が創り出されたときそこに存在した力」について言及し、フォースを「内側から働く力」とであると述べています。

もしかすると私たちは、私たちが想像する以上にはるかに広大な存在なのかもしれません。私たちの無意識の領域には、想像もできないほどの力や叡智が眠っているのかもしれませんが。神話は、私たちが成長するためには、自分自身の価値に気づき、大切なものを求めて試練を乗り越えることが必要だと示してくれています。

デススターに立ち向かうルークに、ベンは「Trust you」と伝えました。筆者も、生徒諸君が自分自身を信じて、イニシエーションを乗り越えて新しい自分へと成長していくことを応援しています。May The Force be with You !

2023年の夏は筆者にとって、キャンベルおじさんとじっくりじっくり語り合った夏でした。

注1) 映画スターウォーズ・シリーズは、最初にエピソード4～6の3部作が公開され、続いてエピソード1～3、最後にエピソード7～9が公開された。エピソード4が全米で公開された1977年当時、すでにルーカスはエピソード1～3のシナリオを書き上げていたが、もっとも面白いエピソード4を最初に映画化した、といわれている。(間違っていたらゴメン)

注2) よい子の皆はマネしないように！

注3) 旧約聖書「ヨナ書」での、預言者ヨナが鯨に吞まれて3日3晩その腹の中で祈ったというエピソードにもとづく。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。